

# 転回視座という詩学——詩人・吉野弘の世界

門脇 道雄

## はじめに

本論文は、現代日本を代表する酒田市出身の詩人・吉野弘（一九二六年～）の第一詩集『消息』（一九五七年）に、労働者から書く人への超出の転位を見て取り、それに伴う転回視座というべき認識と表現方法を見出すものである。詩人の誕生は生い立ちや原初の自己企投への志向と無縁ではなく、商品労働者として扱われることへの反抗を示した『消息』の一群の詩篇は言うまでもなく、「奈々子に」「雪の日に」「夕焼け」など初期の代表作と目される詩篇にも転向の意志を見出し、その後の多くの詩作品もまた転回視座という詩法によって創造されていることを証すものである。

## 一、転位という力学

詩集『消息』（一九五七年）において、「序詞」に始まる反抗の連弾のような十一個の詩群のあとで、娘に語りかける「奈々子に」という詩の出現は意表をついている。すぐあとに「モノローグ」という反抗の布陣が戻ってくるからでもあるが、題名が示すように「奈々子に」は労働という呪縛から解き放たれていつとき他者へと思いを寄せえた作品のように思えるからだ。自分の物思いにかかりつきりだった者が、ふと他者の存在に気づいて安らぎを覚える、そんな内省がここにある。

赤い林檎の頬をして

眠っている 奈々子。

お前のお母さんの頬の赤さは  
そっくり

奈々子の頬にいつてしまつて

ひところのお母さんの

つややかな頬は少し青ざめた

お父さんにも ちよつと

酸っぱい思いがふえた。

唐突だが

奈々子

お父さんは お前に

多くを期待しないだろう。

ひとが

ほかからの期待に応えようとして

どんなに

自分を駄目にしてしまうか

お父さんは はつきり

知つてしまつたから。

お父さんが

お前にあげたいものは

健康と

自分を愛する心だ。

ひとが

ひとでなくなるのは

自分を愛することをやめるときだ。

自分を愛することをやめるとき

ひとは

他人を愛することをやめ

世界を見失つてしまう。

自分があるとき

他人があり

世界がある。

お父さんにも

お母さんにも

酸っぱい苦勞がふえた。

苦勞は

今は

お前にあげられない。

お前にあげたいものは

香りのよい健康と

かちとるにむづかしい

はぐくむにむづかしい

自分を愛する心だ。

二十一年後に現れる「生命は」(一九七六年制作)にお

けるキーワードは、一九五五年に制作された「奈々子に」

のそれと一致することに留意しなければならない。「生命

は」では、「自分」とは欠如を抱いた存在であり、それは

《他者》から満たされ、《世界》は他者の総和である、と

いう論理が貫かれていた。しかしながら、「奈々子に」に

おいては、《自分》があるとき《他人》があり《世界》が

あるという。すなわち、作用する力学の方向を矢印で示

せば次のようになるだろう。

《自分》 ↓ 《他者》 ↓ 《世界》 (「生命は」)

《自分》 ↑ 《他人》 ↑ 《世界》 (「奈々子に」)

「生命は」の主題が世界内存在としての《生命》であつ

たのに対し、「奈々子に」における主題は《自分を愛する

心》である。対他存在としての自己が「生命は」に示さ

れていたのとは対照的に、「奈々子に」には利己的な自己

が示されている。それは、なぜか。

《自分》、《他人》、《世界》というキーワードには、重要

な概念が秘められているように思われる。労働者の抵抗

を示した一群の詩作品のなかにあつて、何よりもまずそ

れらが労働と関わりあいが無いとは思えないからである

が、《自分》、《他人》、《世界》という語彙を労働の磁場へ

と置くならば、「自己」、「同胞」、「組織」、というパラファレーズが可能であろう。帰趨する力学を矢印で示すならば次のようになるのではないか。

「自己」↓「同胞」↓「組織」

「自己」は、「同胞」という集団のなかで宥和を求められ、「組織」では忠誠が求められる。こうした滅私という「壊滅原理」（「滅私奉公」）に対峙して、しかし、「自己」はなす術がないのではない。なすべきことは反抗であり、それは力学の反転を画策することである。すなわち、矢印を逆転させようというのだ。「自己」↑「同胞」↑「組織」というように。

すると、「奈々子に」における表層構造と深層構造が浮かび上がってくる。

「自分」↑「他人」↑「世界」（表層構造）  
「自己」↑「同胞」↑「組織」（深層構造）

「奈々子に」は、娘に思いやりをこめながら説教を説いただけの作品ではない。それは組織への呪詛を吐露した作品群と表裏の関係にあり、位相の転回を図ることによって自己実現を志向した作品と言える。

吉野弘は、一九二六年に酒田市に生まれ、一九四二年十二月に酒田市立商業学校を繰り上げ卒業。翌年一月、帝国石油株に入社、山形鉱業所（酒田市）に勤務。一九四四年に徴兵検査に合格したが、入隊日の五日前に敗戦。戦後は労働運動に専念し、一九四九年九月、過労がたたって肺結核を発病し、三年間の療養生活を送る。一九五三年、詩誌「権」の同人となり、一九五七年に私家版詩集『消息』を出して注目を浴びた。

詩人の誕生は、生い立ちと無縁ではない。労働者から書く人への超出を図ったところに、詩人・吉野弘は誕生する。商品労働者として扱われることへのあからさまな反抗を示した一群の詩篇は言うまでもなく、「奈々子に」のような内省から生まれた詩篇にさえ、負から正への転位が認められる。認識の転位が詩人のありようを規定す

ることを、記憶しておいていい。詩集『消息』の十五番目に置かれた「雪の日に」には、決意としての転位が示されているように思われる。

—— 誠実でありたい。

そんなねがいを

どこから手に入れた。

それは すでに

欺くことではないのに。

それが突然わかってしまった雪の

かなしみの上に 新しい雪が ひたひたと

かさなっている。

雪は 一度 世界を包んでしまうと

そのあと 限りなく降りつづけねばならない。

純白をあとからあとからかさねてゆかないと

雪のよごれをかくすことが出来ないのだ。

誠実が 誠実を

どうしたら欺かないでいることが出来るか

それが もはや

誠実の手には負えなくなってしまったかの

ように

雪は今日も降っている。

雪の上に雪が

その上から雪が

たとえようのない重さで

ひたひたと かさねられてゆく。

かさなつてゆく。

〈苦悩の人が死ぬのを見届けてから〉会社にやつてくる

「君も」における自己と同様に、あるべき自己を求めて魂がさまよっている。〈苦悩の人を殺した蘇らせるくりかえし〉と、誠実への誠実の上乗せは、元はと言えば同じ源にある。どちらも、〈欺くことではない〉。〈雪〉とい

う具象に「誠実」という抽象を発見した詩人が、ここにいる。「雪は一度 世界を包んでしまうと／そのあと限りなく降りつづけねばならない」という詩行の「雪」を「誠実」に替えると、心の内実が現れてくる。すなわち、「誠実」は一度 自分を包んでしまうと／そのあと 限りなく誠実であらねばならない」。誠実こそが、実は自己矛盾である。

自己の内部に矛盾を抱えたままで生きていくことは、つらい。あるべき自己が苦悩しているからだ。そして、自己の内部に誠実を抱えたままで生きていくことはできない。自己実現への未来が閉ざされることになるからだ。雪が降るといふ叙景の深層に秘められているのは、労働を棄てることになる動機であり、それは決断と言っている。労働者から書く人への位相の転回は、己れの志向に誠実であろうとしたことの結実であり、そのようにして吉野弘は詩人になった。

「奈々子に」と「雪の日に」に見られる転位は、その後の作品群の先駆けとなつてすることに留意しなければならぬ。そこで獲得されたのは、転回視座とでも名づけ

るべき詩法である。それは実存への果てなき希求の結実であり、詩集『消息』が詩人へと超出する吉野弘の出発点である理由である。

第一詩集『消息』の記念碑的な出発の意義は、労働者から書く人への転向が詩人を誕生させたばかりではなく、詩法として転回の視点をもたらしたことである。その転回視座というべき認識と表現方法は、その後の詩作品の結実にししばしば見て取れる。その豊饒なる詩作品の結実には、「苦悩の人」から「誠実の人」への転位の果てになしたものだ。彼は誠実を貫いた。「職場で／心を／無用な心を／昼の星のようにかくして／一日を耐える」（「星」）生き方を棄てた。苦渋から優しさへの転位、それは二ヒリストからヒューマニストへの転位である。そして、ここにこそ詩人・吉野弘が実存している。

「苦悩の人」から「誠実の人」への転位。しかしながら、それは受難の旅でもあった。第二詩集『幻・方法』（一九五九年）に収められた「夕焼け」に認められるのは、「受難の人」である。

いつものことだが  
電車は満員だった。

そして

いつものことだが

若者と娘が腰をおろし

としよりが立っていた。

うつむいていた娘が立つて

としよりに席をゆずった。

そそくさとしよりが座った。

礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。

娘は座った。

別のとしよりが娘の前に

横あいから押されてきた。

娘はうつむいた。

しかし

又立つて

席を

そのとしよりにゆずった。

としよりは次の駅で礼を言つて降りた。

娘は座った。

二度あることは　と言う通り

別のとしよりが娘の前に

押し出された。

可哀相に

娘はうつむいて

そして今度は席を立たなかった。

次の駅も

次の駅も

下唇をキュツと噛んで

身体をこわばらせて――。

僕は電車を降りた。

固くなつてうつむいて

娘はどこまで行つたらう。

やさしい心の持主は

いつでもどこでも

われにもあらず受難者となる。

何故つて

やさしい心の持主は

他人のつらさを自分のつらさのように  
感じるから。

やさしい心に責められながら

娘はどこまでゆけるだろう。

下唇を噛んで

つらい気持で

美しい夕焼けも見えないで。

ある夕方の情景を描いた「夕焼け」という作品の表層には老人に席を譲るひとりの娘が現れているが、深層に潜んでいるのは作者である。またしても、「自己」と「他者」との関係がここにある。ところが、「生命は」における関係性とは異なる様子が見て取れる。

「生命は」における「自己」と「他者」とは相互依存の関係性のうちにあつたが、ここで「自己」と「他者」は対立の関係性のうちにある。両者がひとつの座席をめぐって対峙しているのだ。それは算術のようにわかりやすい。問題は「2」のためには「2」がないということである。

一回目は老人に席を譲る。二回目も別の老人に席を譲る。「自己」が「他者」のために譲歩したのである。そのような心の発露が自己犠牲に拠っていると考えることはたやすい。しかしながら、それを詩人は「自分のエゴイズムを裏切ったからだ」（「私の詩の原点」と考える。すると、三回目に席を譲ることを拒否する心の内実が見えてくる。それはエゴイズムの復権である。そして、そこそが「誠実」を推し進めていたものであり、労働を棄てる経緯を説明している。

娘の心情描写が、作者の心情吐露へと移り変わってゆく——〈やさしい心の持主は／いつでもどこでも／われにもあらず受難者となる〉。「苦悩の人」は「誠実の人」であり、そこにはニヒリストからヒューマニストへの転位が見られた。同じように、「やさしい心の持主」は「エゴイスト」であり、そこにはヒューマニストが転向者であつたことが示唆されている。エゴイズムこそは、組織を糾弾して離れ、自己実現への道程を歩むことになる生存の根拠である。

エゴイストはふたたびヒューマニストへと回帰するだ



ろう。なぜなら、彼はもうひとりのエゴイストを他者に見出すからだ。エゴイズムは、したがって、他者とつらさを共有して連帯する。

「自己のやさしい心」⇋「エゴイズム」↓「つらさの共有」↓「他者のやさしい心」

「夕焼け」という作品は、〈やさしい心の持主〉が〈受難者〉となるいきさつを表層に描きながら、深層においてはエゴイズムが自己実現の原動力であったことを証している。この作品もまた負から正への実存の転位を示している。

## 二、転回視座という詩法

転回視座ともいうべき認識と表現方法は、吉野弘にとって詩作における有力な手段である。次の「妻に」（一九六六年）という詩は、視点の転回が否定から肯定への新たな認識を生み出している。

### 起

生まれることも  
死ぬことも  
人間への何かの遠い復讐かも知れない  
と嵯峨さんはしたためた

確かに

### 承

それゆえ、男と女は  
その復讐が永続するための  
一組みの畏というほかない

### 転

私は、しかし  
妻に重さがあると知って驚いた若い日の  
甘美な困惑の中を今もさ迷う

### 結

多分、と私は思う  
遠い復讐とは別の起源をもつ  
遠い餓けがあつたのだと、そして

女の身体に託され、男の心に重さを加える

不可思議な慈しみのようなものを

眠っている妻の傍でもて余したりする

起承転結の論理の転回が、この詩には認められる。〈生まれること〉も〈死ぬこと〉も〈人間への何かの遠い復讐〉と捉えたことで、第一連（起）が起こされる。しかし、これは引用であることからわかるように、詩人の見解が示されているわけではない。己れの認識を導き出す前に、他者の認識が引き出される。

そして、第二連（承）において、引用は己れの内部で検証され深化され、初めて己れの思いが示される。つまり、〈復讐〉の原理を暴いてみせる。〈男と女〉が〈罌〉にかかった（一組み）だというのだ。——人は、なぜ生まれ、なぜ死ぬのか。それが耐え難きものならば、確かに操り主が存在するであろう。しかし、それにしても、人は何ものかに害を与え、そしてその仕返しを受けているというのだろうか。しかし、第二連で推し進められた認識には、まだ主張というべき内実はない。

次の第三連（転）における（しかし）に留意したい。視点の転位を示すこのディスコースマーカーによって、詩人の認識が提示されている。ここに吉野弘の詩法の秘密があり、論理的な転回のあざやかさのうちに詩が結実している。〈甘美な困惑〉というアンビヴァレントな（反対感情両立的な）フレーズが視座の回転軸の中心にある。

「初めての兒に」「父」「I WAS BORN」という三部作で提示されたあの問い——〈何の為に世の中へ出てくるのか〉——が戻ってくる。第三連は「I WAS BORN」の身重の女の挿話の再現である。あの哲学的なアプローチがアンビヴァレンスのうちに解決する。承から結への落差は大きければ大きいほどよい。回転軸を中心に、できるだけ一八〇度の大きな円弧が描ければいい。

詩的結晶とも言うべき結実を示す第四・五連（結）は、したがって第三連（転）によって導き出される。短調から長調への転調とも言うべき否定から肯定への転位。すなわち、〈遠い復讐〉から〈遠い銭け〉への転位にこそ、作品が成立している。この転位は、形式的な論理の力によつており、問いへの回答はまたもやなされているわけ

ではない。あるのは、肯定的回答への志向である。心に加わる慈しみの重さは主観のうちに生まれ、好日性を帯びた内省はプラス波のもとにある。

「妻に」に見られたのは認識の転位であるが、次の「ほぐす」(一九七二年)には比喩における転位が認められる。

A  
小包みの紐の結び目をほぐしながら  
思ってみる

C  
結ぶときより、ほぐすとき  
すこしの辛抱が要るようだ

B  
人と人との愛欲の  
日々に連らねる熱い結び目も

C  
冷めてからあと、ほぐさねばならないとき  
多くのつらい時を費すように

A  
B  
紐であれ、愛欲であれ、結ぶときは  
「結ぶ」とも気付かぬのではない

R  
ほぐすときになって、はじめて  
結んだことに気付くのではない

X  
だから、別れる二人は、それぞれに  
記憶の中の、入りくんだ縫<sup>ち</sup>れに手を当て  
結び目のどれもが思いのほか固いのを  
涙もなしに、なつかしむのではない

Y  
互いのきづなを  
あとで断つことになろうなどとは  
万に一つも考えていなかった日の幸福の結び目  
——その確かな証拠を見つけたように

Z  
小包みの紐の結び目って  
どうしてこうも固いんだろう、などと  
呟きながらほぐした日もあったのを  
寒々と、思い出したりして

第一連で詩人は、〈結ぶ〉と〈ほぐす〉の相反する行為

における心理的差異に触れてはいるが、キーワードは第二連に現れる。つまり、「小包みの紐の結び目」は「人と人の愛欲の」（「熱い結び目」の比喩である。しかしながら、「人と人の愛欲」は「小包みの紐の結び目」のようにと表現されるべきところであるが、「人と人の愛欲」は「小包みの紐の結び目」の譬えのように現れてくる。比喩の転位がここにあり、比喩がそれ自体で独立しうる詩法がここにある。

第三連になつて主張が見られる。論述は一見、三段論法に拠っているように思われる。「小包みの紐の結び目は、ほぐすのに辛抱がいる」、「人と人の愛欲は、小包みの紐の結び目のようである」、ゆえに「人と人の愛欲は、ほぐすのがつらい」。しかしながら、吉野弘が用いた論法は、より単純である。つまり、AはCであり、BもまたCである。したがって、AとBはCという共通性を持つておりRである、という論法である。しかしながら、Bを述べるのにAが引き出されており、どちらもRであるという認識は、転回視座に拠っている。

一極が他極によつて知らしめられる。「ほぐす」と「結

ぶ」を、死と生の相に置いてみれば、「マイナスのほうからプラスが見える」（「私の詩の原点」という吉野弘の哲学が垣間見られる。つまり、「ほぐすときになつて、はじめて／結んだことに気付くのではないか」という二行は、たとえば次のように言い換えることも可能である——「死ぬときになつて、はじめて／生きたことに気付くのではないか」。こうして、命題が公式に当てはまるように機能するところに転回視座という魔法があり、それは天の高みにある座標系において操作される創造主の術である。そして、X、Y、Zのような主観的な回想が、論理的な論述のあとで繰り広げられるところに吉野弘による特有の叙情がある。

「樹」（一九七三年）という作品にもまた、比喩における転位が認められる。この詩は単に人を樹という比喩で語っているのではない。むしろ、比喩としての樹が人と対峙するように向き合っている。そして、精神の在りかを樹のほうに見て取る詩法がここにある。

A  
B

人もまた、一本の樹ではなからうか。  
樹の自己主張が枝を張り出すように  
人のそれも、見えない枝を四方に張り出す。

O

R

身近な者同士、許し合えぬことが多いのは  
枝と枝とが深く交差するからだ。  
それとは知らず、いらだつて身をよじり  
互いに傷つき折れたりもする。

仕方のないことだ

枝を張らない自我なんて、ない。

しかも人は、生きるためには歩き回る樹  
互いに刃をまじえぬ筈がない。

B

枝の繁茂しすぎた山野の樹は

風の力を借りて梢を激しく打ち合わせ

密生した枝を払い落とす——と

S

庭師の語るのを聞いたことがある。

A

人は、どうなのだろう？  
剪定鋏を私自身の内部に入れ、小暗い自我を  
刈り込んだ記憶は、まだ、ないけれど。

この詩は、「ほぐす」に見られた論述を逆から辿っている。A（人）はB（樹）であり、どちらもOである。そして、Oである理由はRであるからだ。それならば、どうあればいいのか。すなわち、B（樹）はSである。したがって、A（人）もまたSのようにあるべきだという論法である。

樹は、枝を四方に張り出すことによつて、自己主張するという。〈枝〉は〈自我〉の比喩であり、それは最後まで伏せられているが、論述の流れがそれを仄めかす。つまり、〈自我〉もまた、刈り込む必要があるのだと。〈枝〉＝〈自我〉という発見が、この詩の生成の源にある。それは、認識の対象を転位させえたからだ。

認識の転位であれ、比喩の転位であれ、これらの転回視座は主観の認識を強固ならしめる。位相の転回は、客観を志向しながら、内側から沸き起こった唯一の己れの

考えを外側から補強するからである。次の「湖」（詩集『感傷旅行』／一九七一年）という詩は、転位それ自体を詠った作品であり、詩作の原理そのものを垣間見せている。

湖をのぞきこむものは すべて

湖から 逆さに観察され

逆さに批評される。

しかも

高い山 高い樹は

低い山 低い樹より 深く

水底に沈められて。

さて

他を批評するだけで

自分を批評しない湖は

とらえている空の高さを

自分の深さだと信じている。

そんな湖を

いまいましく思っている風は

ときおり 湖面に一打ち浴びせ

湖の批評眼とやらを

あつさり かき乱す。

〈高い〉〈低い〉の互いの反意語が、意味を反転させる。

〈高い山〉が低い〈深い〉山になり、〈高い樹〉が低い

〈深い〉樹になる。湖面が回転視座の座標軸であることを

発見した詩人がここにいる。座標系を獲得した詩人は、

この視座に批評を加えることをもまた忘れない。転回視

座は批評を伴って現れてきたのだしたが、その批評眼に

さらに批評を加えようというのだ。〈風〉がその役割を担

う。つまり、前半のXの部分には回転視座を獲得した詩

人を顕し、後半のYの部分ではそれに自己批評を与える。

形象的認識によつて自然界の事物に己れの詩作の原理を

見て取った詩人、すなわち、世界を認識するに形象をもつ

てする詩法を編み出した詩人がここにいる。

〈湖面〉は吉野弘の転回視座の回転軸の象徴であり、

〈風〉は自己批評という転位の原理を象徴している。次の

「日向で」（一九七九年）では、〈湖面〉を境にして〈私〉

と〈蠅〉が対峙しており、〈風〉は、見えないけれども自然界に漂流しながら、この世の生きとし生けるものの営みを批評の座標系へと取り込んでいる。そして、〈私〉と〈蠅〉。どちらが上に（下に）いるのかは、わからない。

日向で

蠅が翅をふるわせている

私が蠅に生まれる可能性も

あつた筈

私の親が蠅であれば

私も蠅だった

勤めの配属先が

何かの偶然で分かれるように

生まれの配属先が

人だったり蠅だったり三味線草だったり

人という辞令をもらった私は

見ている

蠅という辞令をもらったものの翅が

ありあまる光に温められているのを

〈私〉が〈蠅〉を見ていることと同じレベルで、〈私〉が〈蠅〉から見られている。どちらも回転軸を境にして対称の位置にある。どちらも立場を置換させることが可能な世界に棲息している。人が蠅の立場で見ることが必要であり、その逆もまた必要である。ここにある転回視座は、労働者から詩人へ、ニヒリストからヒューマニストへの転位を果たした者が獲得しえた詩法である。豊饒なる作品の結実は、それによって約束された。

### 〔引用文献〕

吉野弘著『吉野弘詩集』（青土社／一九八一年）  
花神ブックス2『吉野弘』（花神社／一九八六年）